

栗原裕一郎さん



3冊の本棚

体制に否！を突き付けて登場した音楽が、あれよと音楽産業に組み込まれ売れ筋商品に化ける。フォークもロックもパシクもみんなさうだ。その繰り返し。

音楽に限らない。社会の抑圧や資本主義への抵抗であるはずの文化が、毎度易々と体制に飲み込まれてしまうのはなぜなのか。① ジョセフ・ヒース&アンドルー・ポター『反逆の神話〈新版〉』「反



新時代の寛容とは

体制』はカネになる』（栗原百代訳、ハヤカワ文庫・一四三〇円）の答えは明快である。反逆の文化それ自体が「消費主義のきわめて強大な原動力」だからだ。

矛盾を突くシニカルな語り口の面白さに目を奪われがちだが、著者たちの本意は、文化を主戦場としたがる左翼的戦略の限界を抉り出すことにある。

だがそれも昔の話になった。原著の初版は二〇〇四年だ。新たな序文では、カウンターカルチャーの主流がオルタナ右翼に代わり、左派の活動はSNSで政治的正しさを主張する「美德シグナリング」に移ったことが補足されている。

オルタナ右翼は日本では「ネットウヨ」となるが、彼らの自意識が「反体制」であったことは、② 伊藤昌亮『ネット右派の歴史社会学』（青弓社・三三〇〇円）でも繰り返し説かれている。打倒すべき「権威」「体制」と見なされたのは「サヨク」、まず何より、リベラル市民主義

の擁護者としての朝日新聞である。

ネット右翼とはいうものの、胎動はインターネット前夜、冷戦崩壊後に始まる。マスコミとネット掲示板が共振し、いくつもの保守クラスタが集合離散してネット右派論壇が形成されていった経緯を綿密に掘り起こして、いや、大変な労作である。「ネットウヨ」を反知性主義者の群と退けず、彼らがそのようなに至った内的必然性に寄り添い、思想史として描き出してみせた点に寛容を感じた。

SNSに主戦場を移した左派について『反逆の神話』は、キャンセル・カルチ



不寛容論

アメリカが生んだ「共存」の哲学

ヤーなど「不寛容」を強めていることを指摘する。③ 森本あんり『不寛容論 アメリカが生んだ「共存」の哲学』（新潮選書・一七六〇円）は、「寛容とは自分と違う人や自分が否定的に評価するものを受け入れること」だと定義し、ロジャー・ウィリアムズという十七世紀の特異なピューリタンに焦点を当てる。

独立以前の植民地アメリカで、本国の英国教会に楯突き、ジョン・ロックより進んだ寛容論を半世紀も早く実践していたウィリアムズは、妥協というものを一切しない、不屈というより偏屈な変人である。そんな「不寛容の塊とも言える人間」から「新しい時代の寛容が生み出されることになるのは、歴史の不思議である」という森本の評価が面白い。

（評論家）